

# 職人の技を受け継ぎ歴史・文化を継承する 金沢職人大学校だより

## ◆ 歴史的建造物復元整備と職大の役割

本年5月に、沖縄総合事務局、沖縄県をはじめとする世界遺産首里城（正殿）の復興チームが視察に來られました。同チームは城の復興整備に当たり、職人の確保と同時に完成後の維持・補修を含めた中長期的な人材育成に取り組んでおり、先進事例として本校や金沢城の復元整備について視察されました（右写真）。

また、昨年度に引き続き、本年度も本校で、全国の国宝や重要文化財建造物の設計、施工管理等を担う（公財）文化財建造物保存技術協会が実施する文化財修理技術者中堅技術者研修の初級クラスが7月に、また9月には上級クラスが開催され、その研修講師を本校の講師陣が務めています。

さらに、修復専攻科の研修において、金沢城の二ノ丸内堀から出土した銅板の観察調査を行い、「チャン塗」された銅丸瓦の可能性のあることを提起したことを受けて再調査が行われ、その可能性が示唆されるなど、石川県にも当校と当校で学んだ高度な技術と知識を持つ職人の存在が認識されてきています。近く実施予定の金沢城の二の丸御殿の復元整備にも多くの職種でその能力を遺憾なく発揮して頂くことを期待しています。

これらの事例にみるように、今や金沢市が独自の施策として取組む金沢職人大学校の役割は広がりを見せており、全国でも注目される存在になっていると感じています。今後もこのような役割を含めて努力していきたいと思ひます。



## 授業参観・作品展示バザー

本年5月28日（土）に3年ぶりに開催しました。感染対策を十分に行って、各科それぞれ授業を行い、朝早くからたくさんの方が来校、授業や作品展示を見たり、バザー作品を購入されました。バザー作品は午前中で完売するところも出るなど大変盛況でした。また、6月から始まった子どもマイスタースクール11期生のご家族も見に来てくれました。



## 謡曲・お茶教室教室の修了式

謡曲教室はコロナ禍、練習を時短で行い、本年3月10日に県立能楽堂にて発表会・修了式を研修生12名が参加して行われました。お茶教室は、新型コロナ禍で練習の中止を余儀なくされ、予定より2ヶ月遅れ、本年5月15日に長町研修塾の匠心庵でお茶会を川上理事長にも参加していただき、修了生8名が参加して無事執り行われました。





## ◆ 本科：第9期生(2020年10月入学)の研修内容

本科の9科計42名が、月数回、夜間や土日に研修しています!

### 石工科

軟石裏面の平削り加工を行っていました。最終的には石塀になるそうです。手作業で削るのは岡崎市の訓練学校以来だそうで通常の仕事ではほとんど無いそうです。結構難しく、しんどい作業ですが、普段しない作業なのでとても新鮮な気持ちになるそうです。夜でもまだ暑く汗をかきながらの作業でした。中に大変日焼けしている方がいたのですが「仕事焼けです!」ときっぱり笑顔で答えていました。



### 左官科

大津磨きの授業を行っていました。大津磨きとは土に苧(すさ)と石灰をまぜた材料で塗る高度な仕上げの作業です。一日中光沢が出るまで塗り続けるそうです。全国的には有名な大津壁ですが、滋賀の大津が名前の由来で、石川県では加賀九谷焼美術館で見ることが出来るそうです。これまで講習会でしか作業をした事が無く、とても難しい技法とのこと、ほとんど仕事でする事はないそうです。



### 大工科

大工科では、彫刻、鬼瓦の授業を行っていました。この日はとても暑い日の中、汗をかきながら彫刻を行っていました。研修生の方々に入校して約2年間経ちますがどうですかとたずねると、「貴重な経験が来ている」、「難しい作業が多いが大変楽しく勉強になっています」などのうれしい返事がいただけました。また、毎回の授業の日が待ち遠しく癒しの時間ですと言っている方もいました。

鬼瓦には、木の型に板金で仕上げるものがあります。



### 瓦科

破風(ハフ)にザグリをして敷平瓦(平瓦の下に敷く瓦)をのせる作業を行いました。研修生は能登から来ているので片道1時間半かかかりますが奥様の理解があり苦にならなかったそうです。(素敵な奥様ですね)講師の皆さんも優しく、知らない事ばかりで本当に自分にプラスになることばかりであっという間の2年間だったそうです。あと1年間しかありませんがしっかり勉強していききたいとのことでした。



### 造園科

造園科では、滝石組や流れ石組実習の授業を行っていました。大きな石をクレーンで持ち上げ、みんなで相談しながら石組をしていました。知らないことばかりで、いろんな貴重な経験が出来るとのことでした。また、同期の研修生からも教えられることもあり、その場合、尋ねやすいなど、自分の技術向上に繋がっているとのことでした。



### 畳科

畳科では、御神座(ごしんざ)の土台作りの授業を行っていました。研修生は関西圏から来ており、先日の大雨による北陸自動車道の福井県内で通行止めがあったとき、東海北陸自動車道経由で来られたそうです。入校されて2年経ちますがと尋ねると、「突っ走っている感じでこっちに来ている時のほうが職人さんのようで大変充実している時間を送っている」とのこと、また「ここでしか学べない初めてのことが多く、大変勉強になっている」とのこと。





## 建具科

建具科では、組子細工製作を行っていました。組子の中ではベーシックな麻の葉の細工を、各研修生がデザインした組子の細かい作業を行っていました。石川県では370年の歴史がある田鶴浜の建具が有名で、尾張の国の指物師から技術を習得し精巧な細工と高度な仕上がりを持つのが始まりだそうです。研修生は、普段しない事ばかりですが、技術の幅が広く、とてもためになっているとのことでした。



## 表具科

表具科では、掛軸の仕上げを行っていました。本物の掛軸を骨董屋で購入し、締め直し作業として以前に貼っていた裏打ち紙を丁寧にはがし、耳すきと言う必要の無い貼りシロを切って表装をしていました。前期までの研修生が締め直し作業を行った作品も本校に残しているそうです。

なお、9月14～19日に石川県表具展が開催されましたが、会場には研修生の作品も展示されました。本展示会は4年ごとに開催されます。



## 板金科

レリーフを製作していました。研修生がデザインした銅板を熱した松脂(まつやに)を台にして叩いていきます。銅板がへこみすぎないように松脂を台にし、硬くなってきたらまたバーナーで熱します。人や花を書き写した銅板を立体的に叩き3回の授業でレリーフを完成させます。約2年間の感想は「普段しないことが多くためになることばかりで作業は難しいが毎回楽しくワクワクしながら勉強しているとのこと。



## 子どもマイスターズスクール

本年6月に子どもマイスターズスクール11期生小学校4～6年生の12名が入校しました。2年間、当校講師の職人さんから「ものづくり」の技術を体験していきます。早速6月25日に木製立体パズルを製作しました。初めての本格的な道具使用に戸惑いながらも「ものづくり」が好きで応募してきていただけあって目を輝かせていました。その後、泥団子、飾りパネル作り、鬼瓦作りを体験しました。



## ◆修復専攻科の研修内容（木の研修）

修復に必要な専門知識と技術の修得に取り組みました。

講義では、歴史的建造物が建てられ、その後の長い時間の中で、手を加えながら再利用されてきた歴史を学びました。傷んだところを繕うための修理方法、時間の経過とともに劣化していく機能を維持するための補強方法、使用者のニーズと維持管理のバランスを考えた活用方法の事例について学びました。

実習では、木造建造物の理解を深めるため、石川県農林総合研究センターで木の研修を行いました。林業試験場の展示館では木材組織、木材の劣化と保存対策、木材の乾燥と強度等について講義を受け、樹木公園では県産材の樹木見学を通して林業の基礎を学びました。

石川ウッドセンターでは、非破壊試験によって木の曲げ強さを把握できる方法を学びました。

能登ヒバと地元のスギを非破壊試験し、実大強度試験機で曲げ試験を行いました。その結果、非破壊試験で得られた値と曲げ試験で得られた結果が同等であることを確認し、簡易的な方法で木の特性を把握できる技術を修得しました。

傷んだところを繕う修理方法については、文化財建造物木工技能士でもある安田・丸田指導員に埋木と根継ぎの技法を実演していただきました。

実技演習の中で見聞したことを記録することによって、受け継がれてきた修理技術の知識を修得しました。



実大強度試験機での曲げ試験の様子



## 歴史的建造物の紹介

### 旧永井家住宅に活用された門

この門は、もとは長土堀1丁目にありました。周辺は藩政期の下屋敷地で、門の建っていた辺りは今枝氏の家中町でした。

教材として提供いただいた旧所有者によると、この門は旧加賀藩士が所有していたもので、



長土堀にあった頃の門

1940年に先代が購入し、2008年の自宅改築を機に取り壊すことになりました。郷土史家の山森青硯氏の助言もあったことから活用先を探しており、親交のあった修了生を通じて当校に相談があり、修復専攻科の実習教材として活用されることになりました。

多様な職種で調査に取り組んだ結果、取り外された部材には改修の跡がみられたものの、創建時の姿がよく保たれていることがわかりました。

とりわけ傷みやすい木羽葺と板葺が屋根下地として遺っていました。いずれも風雨に晒されていたことから、棧瓦葺以前に葺かれていた屋根材と分かりました。また、門の出入口には、かつて柱が建っていた痕跡が確認され、その柱の一部が側柱の根継ぎ材に再利用されていました。この側柱には大戸の取り付け痕跡も確認できました。左右の下見板は、板壁の健全な部分を転用したものであることもわかりました。

この門には良質な材料が使われ、堅実な建築技法でつくられていました。質素な門は武家の門であったと考えられることから、金沢湯涌江戸村で保存されることになり、調査成果に基づいて活用が図られました。

#### 【編集後記】

本校においてもコロナ禍に翻弄されてきた2年半でした。休校措置は2度実施、なんとか研修は行っているものの、修復専攻科は修了を延期、研修生の視察は困難で、市民参加事業も募集定員を減らすなどしています。行動制限が行われないようになりましたので、本校でも徐々に各種の授業などを元通りに実施しつつあります。本校の研修は、技術を人から人に体験的に伝えることが中心です。そのことを常に意識して、今後も工夫していきます。(M.K.)

## 修了生の紹介／出口秀樹氏

出口氏(53歳)は本科第3期生(石工)、修復専攻科第3期生で、本科講師を6期生から担当。父昭氏が創業した(株)出口石材を継ぎ、第二人と運営。業務は石全般で、建築も土木も行う。高卒後、岡崎市で働きながら4年間修



行して戻られた。全国技能グランプリを2回受賞(凄い!)。豪姫や村井家の墓石の修復、金澤町家の修復などを手掛ける。仕事ではお金ではなく、自分の技術を思い切り見せたいと言われる。

修行は根気よくやるのが大切で、失敗もよい経験ととらえるのが上達のみちすじとのこと。

## 講師(左官科)紹介 宮嶋久也氏

宮嶋氏(70歳)は、16歳のときに創業の父のもとで指導を受け左官の技術を習得、まだ現役で54年間左官業に従事されています。職大の講師をされ約15年。伝統技術を指導出来る職大は素晴らしい施設で、今後も長く育成していきたいとのこと。教えるときは、時には厳しく、真心と愛情を持って、一生懸命、自分の知識や技術を修得出来るように指導。今期9期生は真面目に前向きに取り組んでおり、レベルは高いそうです。



現在、次男が後を継いでおられます。子どもは3人、孫が6人。一番の楽しみは毎日の晩酌で、奥様の手作りの和食で焼酎を一杯半飲むことだそうです。

「金沢職人大学校だより」No. 06、2022年10月

【発行・問合せ先】

公益社団法人 金沢職人大学校  
理事長・学校長 川上光彦  
住所：金沢市大和町1番1号



(金沢市民芸術村の一角にあります。)  
Tel 076-265-8311 Fax 076-225-8314  
Webサイト <http://www.k-syokudai.jp/>  
事務局：平日9:00~17:00、土日・祝日休み